

オンラインで P4C 報告

2023 年 2 月 11 日 (土) 15:00~ 17:00

場所 オンライン

主催 P4C in schools KANSAI-JAPAN

発表者：町田晃大 東京都足立区立小学校教諭

対象：学校関係者

参加費：無料

参加者：36 名

発表内容：「哲学対話を取り入れた道徳授業」

約 2 年間哲学対話を行なってきた児童たちとの授業記録。

「他者の意見を聞く意義」「深く考えるとはどういうことか」「哲学対話を通して自分たちはどのような変化があったのか」の児童たち自身による紹介。

模擬授業を取り入れて、参加者との対話も実践。

1. 自己紹介

2. 模擬授業

6 年生の道徳のテキスト「小川笙船」

テキストを読んだ後、感想を言ってもらう、あるいはチャットで書いてもらう。

感想を聞いて、その理由を尋ねる。

例えば、自分は笙船にあこがれるけど、笙船のようにはできない。

↓

そうですね、じゃ、どうして自分はできないんだろうか。みんなもやればいいのに、どうしてできないんだろう。そもそも、笙船はお金があるんだから、やんなくてもいいんじゃない

↓

人間って、人の役に立ちたい、人の喜ぶことをしたいという気持ちがあるんだと思う。それが生きがいというか、自分だけがいいということを選ばないんじゃないかな。

そうですね、それじゃ皆さん、今の意見についてどう思いますか。

このような形でテキストの内容の理解を深めながら、次に、子どもに問いを作ってもらう。通常は 4 人のグループで話し合ってもらう。

今回出てきた問いは、

- ・ 人格は育てられるのか
- ・ なぜ自分のことよりも、貧しい人をたいせつにするのか
- ・ こういう物語に人はなぜ感動するのか
- ・ なぜ、人の役に立つとうれしいのかな。
- ・ 自己犠牲って誰のため？
- ・ 人の役に立ちたいにはなんで？
- ・ これにつけ込んで悪いことをする人はいないのかな。
- ・ 人のために生きることと、自分のために生きることとはどう違う
- ・ 小川笙船は誰のために生きていたのか

3. 実際の授業の紹介（内容項目：よりよく生きる喜び）

3 クラスで実施

それぞれのクラスで選ばれた問い

A クラス：笙船にとって人助けはいきがいだったのか？

「いきがい」とは何かという事から議論が展開した。

最後に学習感想を書いてもらう。

（板書の紹介）

B クラス：なぜ小川さんはお金も貰えないのに、貧しい人を助けたのか？

C クラス：笙船は自分に得がないのに、なぜ人助けできるの？

問いが決まった後は、今回はすぐに議論を始めた。

4. 児童から見た哲学対話の道徳授業

1年間で振り返って、道徳が好きになったのは84%、嫌いになったのは16%。

- ・ いままでは、先生が問いを出していたし、他の教科では先生が問いを出すけど、道徳は自分たちで問いを作れる。
- ・ 自由に発言できることが好き。意見が出しやすいし、話し合いやすかった。
- ・ 問いを作るのが面白い。考える力がつく。
- ・ いろいろな考え方を聞くのが面白かった。
- ・ 意見を出し合って、考えを広げたり、深めたりするのが楽しかった。

嫌いな理由

- ・ 考えをとっても深く考えてしまい頭がゴチャゴチャになるから。

「町田先生の道徳って何するの？哲学って？」という問いに対して、

- ・ 自分達で問いを決めて、その問いに対しての自分の考えを友達と共有して話し合う

- ・自分だけじゃなくて友達と一緒に協力しながらやる。
- ・当たり前のことを深める授業、哲学は答えのないものについて話し合う
- ・知っていることをより深く考える
- ・普段考えないものをみんなの意見と、自分の意見を使って話し合うもの。
- ・人の意見について考えたり、反対したりして、考えを深める。

子どもたちからは、自分たちだけでは難しいという声が出たので、今年度は

- ・学期ごとに振り返りをして
- ・教師の出を制限
- ・子どもたちだけの哲学対話（これは「道徳」じゃないという批判がある）

道徳の授業 27 回目にこれまでの 26 回を振り返る

必ず書くこと

- ① 問い
- ② 最初の考え
- ③ 学習感想

この方法

- ① 同じ問いです
- ② 新しく問いを作る
- ③ 全体を通して学んだことや成長したことを書く
- ④ その他（募集中）

以前出た問いを 5-6 人のグループでもう一度話し合う

新しい問いを作ってグループで話し合う

学んだこと、成長したことで問いを作る

Q&A

いきがいについて

Q：子どもたちは「いきがい」をどう捉えていたか。

A：「いきがい」については子どもが色々な考えを出して議論した。

道徳は嫌い

Q：道徳が嫌いといった子が、頭がぐちゃぐちゃになると言っていたが、それは無理やり発言させられるからということではなかったのか。

A：p4c と一緒に、ボールを持っている人が話すので、話さなくてもいいという了解はあ

った。

哲学対話にふさわしくない問い

Q：対話の最初には、哲学的問いにはふさわしくないものはなかったのか。

A：最初はこういう問いが向いているよねって、示すが、議論に慣れてくるにしたがって、この問いってさー、面白いけど、深まらないよねというように、自分たちから問いを選べるようになる。道徳の教科書を使うと、いい問いが出てくるなって思う。

C：学校で継続的にする場合と外から入って対話をする場合とは違う。学年の問題もある。

子どもたちの対話力

Q：対話の力を養う必要があるということでしたが、子どもたちが哲学対話をしていく中で、子どもたちは問答法みたいなものができるようになっていくのか、それとも、問いを作る力そのものが見につくのか、その辺のことをもう少し具体的に聴きたい。

A：哲学対話は、例えば批判的思考などが見につくと言われるが、子どもたち自身が何の力が身についていると言っているかといえば、人の話を聞いて考えが広がった、自分の考えを話すことができるようになった。先生の方に向いていた態度が、友だちへと目を向けている。友達の話には意味があって、価値があるということが分かり、自然に人の話に耳を傾けるようになった。

教室のレイアウト

Q：対話をするときに、教室のレイアウトなどで気にしていることはありますか。

A：円座になるくらいですかね。そして、みんなで考える時は真ん中を剥いて、一人で考える（というよりも、書く場合には後ろに向く。子どもはタブレットを使っているので、自分の考えを書いてもらいみんなで共有する）。グループで話し合うケースが多いので、グループを適切に作れるように座ってもらう。

Q：教室のレイアウトは難しいと感じていて、机があった方が安心感があるとも思っているのですが、ずっと円になっているというのは、緊張してしまうこともあるんじゃないか。

A：机は外側に置いておいて、書くときとか、タブレットを打つときとかは、その机に向かって、話す時は机から向きを変えて中心に向く。

主人公の心情理解と P4C

Q：国語の授業のように主人公の気持ちを考えさせない、というコメントがありましたが、道徳の時間では自分の気持ちを考えることが大事ということが趣旨だと思うのですが、国語と道徳の授業の違いをどのように意識されているか。

A：道徳にもいろいろな手法があって、一般的には、主人公の気持ちを考えさせて、共感させて、道徳的価値を自覚させるという手法が使われていますが、本当にそのような方法

で道徳的価値を自覚するのかなーと思っている。哲学対話では、考えたい問いを考えると
いうことがある。問い作りの時に、なぜ笹船はという子もいれば、自分を犠牲にすること
はいいのという子もいるので、主人公の心情はそれほど重要視しなくなった。

哲学対話についていけない場合

Q：自分の通っていた学校では、哲学対話的な授業だったけれど、内容が難しすぎてなか
なか考えられず、あまり注目されなかったという友達が結構いたのですが、そういう場合
は、どのように受け止めて、考える力を育てていくのでしょうか。

A：難しいですね。哲学対話でよく言われるのは、発言する人が同じでいいのですか、と
言われるが、黙っていても考えているとか、振り返りでそれを書いている子もいる。子
どもがタブレットに書いたものに、「あっ、そんな風に考えているんだ」と書き込んだり、
「こういう意見でいいよね」、「自分のことを考えているよね」、「深く考えているよね」と
書き込んで示したりすると、子どもたちはそうすれば深く考えることになるのかというこ
とを学んでいく。そして多面的な視点を身につけて行く。

A：理想的なモデルを示していくというようなことですね。

発言する子が決まって来ないか

Q：哲学対話の授業をしていると、考えが深い子、いいところを考える子というのがいて、
それがだいたいどの時間でも、議論の転機となるようなことを言ってくれる子というのは、
同じ子の場合ではあっても、いる。これはこれですごいことだとは思いますが、どうなんだと
いう気もないではないので、どう思われますか。みんながそういう力をつければいいのか
考えればいいのか。

A：やはり、発言力の凄い子はいます。そういう子が欠席すると、対話の授業では、今日
は〇〇ちゃんがないので、対話は深まらなかったという子が出てきた時、私はそれでい
いの、〇〇ちゃんは中学校に行ったらいないかもしれないよ、このままでいいのと問い返
した。子どもに、先生は裏技を出すので、それを使うといいよ、と言って Q ワード
（「NHKQ～子どものための哲学」を参照）を出す。最初の頃は、一時間ひたすら「なん
で？」を使うゲームをする。これに慣れてくると、色々な子が問いを出してくれたり、コ
メントをしたりしてくれるようになる。「誰の考えで考えが深まった」というアンケート
を作っておいて、誰の意見を取り入れることによって考えが深まったという自覚を持つよ
うにしている。

板書について

Q：板書の問題ですが、対話が盛り上がっていると思う時には、板書が追いつかないし、
自分で対話を止めてしまっていることもある。板書を丁寧に行っている先生もいる。それは
後で振り返りしやすいようにしているのだろうとは思いますが、第三者目線で見た時、あっ、

いま対話を止めたなと思う瞬間がある。板書はどうあるべきかということについて、意見をお聞かせください。

A：今は、先生としてファシリテーターもせずに、ひたすら板書している。子どもたちには先生は板書だけするから、対話は自分たちで回してと言って、子どもにさせている。板書が止まる場合は、やはり子どもたちの対話も止まっている。その場合は、子どもたちから分からないという発言が出てくる。

C：私は板書はしません。板書しない派です。

発言が続かないときは

Q：全く P4C の経験はないのですが、コミュニティボールを回して発言していくということでしたが、意見が出なくて、ボールが舞わないことなどはあるのでしょうか。

A：それはすごくあります。最初はほとんど意見などは出ません。話し合いという経験がほとんどなく、自分の意見をただ言うだけ。話し合いにならずに、言って終わりという感じ。基本的に、教師に向かって言いたい。これを矯正していくにはやはり時間がかかります。

以上
文責 梶形